

発音学習におけるグループモニタリング活動の可能性 —学習者の意識の変化を中心に—

房 賢嬉

要 旨

本研究は、発音や発音学習過程を内省するグループモニタリング活動を通して、学習者の意識がどのように変化するかを考察し、グループモニタリング活動の可能性を提示することを目的とする。韓国人成人日本語学習者 14 名のコース前後のインタビューをデータとして分析した結果、「意識的な自己モニタリング」、「具体的な自己評価」、「発音学習観の変化」、「自信の現れ」という 4 つの変化が現れた。このような結果から、自分や他の学習者の発音に注目するグループモニタリング活動を繰り返すことにより、学習者が自分の発音や発音学習の過程を意識することができるようになる可能性、さらに、そのような意識化は学習観や発音学習の目標の再設定に発展し、発音学習の動機づけやコミュニケーションに対する自信に繋がる可能性が示唆された。

【キーワード】 グループモニタリング活動、内省、意識の変化

1. はじめに

日本語学習者の発音に対するニーズは実に高く、日本語教育学会（1991）や小河原（1996）が日本語教育機関に在籍している学習者を対象に学習のニーズを調べるために行った質問紙調査では、両調査とも 4 技能中「話す」技能が最も重視され、その具体的なニーズとして「自然な発音・イントネーションで話す」が上位に挙げられている。このような発音への高いニーズに伴い、学習者の母語別の対照分析や誤用分析、日本人母語話者による非母語話者の発音への評価研究など、発音に関する様々な研究がなされてきた。これらの研究は、いわゆる学習者の発音の弱点や日本人母語話者が要求する発音の基準を提示することにより、結果的には「自然な日本語の使用」を学習者に求めている。

しかし、近年の日本語教育は、かつての ESL 教育と同じく、発音の正確さを求めるよりはコミュニケーションする際、意味の伝達に重点を置き、相手に理解できる範囲の発音であれば許容されるという考え方に変化している（Morley, 1975、Neufeld, 1980、

岡崎・岡崎, 1990)。また、近年就学生だけでなく、ビジネスマンや国際結婚による外国人配偶者など、多様な背景や特別なニーズを持つ学習者が増加してきている。このように学習者の多様なニーズを反映するためには、「教師が何をどのように教えるか」に焦点を当てるより、学習者自身が、どのような発音を問題にし、その問題を解決するためにはどうすればいいかを考えるといった「学習者がどう学ぶか」に焦点を当てた研究が必要なのではないかと思われる。

2. 先行研究

Neufeld (1980) は、発音教育の目標が native-like な発音より、コミュニケーションのための分かりやすい発音に変わっていることと、学習者一人一人のゴールやニーズが違ってもかかわらず、今までの ESL クラスではプログラムが定めた目標を満たすために、学習者のニーズやゴールを無視してきたと指摘した。L2 の音韻体系を習得するために重要なことは、自分のパフォーマンスを意識することであり、それは自己モニタリング (self-monitoring) またはピアモニタリング (peer-monitoring)⁽¹⁾ の教育を通して大いに達成されると述べている。Kenworthy (1987) は、学習者自らが進んで発音学習に対する自分の努力をモニタリングし、それを習慣化しようとする努力をしなければ、発音の変化や改善は最低限になるとしている。Vitanova&Miller (2002) は発音教育に内省的活動を取り入れ、学習者に自分の発音の問題や学習過程を意識させることにより、学習者が自分自身の発音に気づいてそれを直したいという動機づけや、自分の発音の変化への気づき、これからの発音学習に対する積極的な態度にいい影響があると述べている。また、このように学習を意識させる活動は学習者のニーズを授業に正しく反映することにも有効であると述べている。これらの研究は、発音学習に対する学習者自身の態度がいかに重要であることを示しており、学習者自身の発音や発音学習過程を意識させる教育の重要性を述べている。つまり、発音が改善されるかどうかという問題以前に学習者の発音や発音学習過程を意識させるきっかけを作ることが必要であることを示唆している。

それでは、そのようなきっかけを作ることによって学習者の意識にはどのような変化が現れるだろうか。小河原 (1998) は、自己評価意識を高める活動を 4 週間実施し、コース前後の質問紙調査⁽²⁾を通して学習者の発音学習意識と行動の変化を分析した結果、コース後の発音学習意識が高まっていることが明らかになった。しかし、この研

究は、発音学習ストラテジー使用の変化を調べることで、発音学習意識の変化を数値的に表していることにとどまっており、質問紙項目に現れていない学習者の意識の変化や変化のプロセスを提示することには至っていない。発音や発音学習過程に注目させる学習がどのような可能性を持っているかを明らかにするには、そのような活動を経験した学習者の意識の変化を探り、質的に分析する必要があると思われる。

3. 研究目的

本稿では、学習者が目標言語の発音や発音に対する社会言語的知識⁽³⁾を他者とのインタラクションを通して内省したり、調整したりする活動をグループモニタリング活動とし、そのような活動を通して学習者の意識にどのような変化が現れるかを検討する。

グループモニタリング活動の中で、学習者は多様なストラテジーを使ったり、色々な形のやりとりをしたりしながら自分の発音や発音学習に注目し、学習を深めていく。そのような活動を通して現れた学習者の意識の変化を探ることにより、グループモニタリング活動の可能性の一つとして学習者の意識面への影響を示唆することができると考えられる。

4. 研究方法

4.1 対象者

対象者は、本研究のために特設した中級会話クラス（2003年5月～8月、10回）に参加した韓国人成人日本語学習者15名（女10、男5）である。対象者は、このクラス以外の日本語学校には通っていないことを前提として選んだ。その理由は、本研究が多様なニーズと学習ゴールを持っている成人学習者を対象にし、コース前後に生じる意識の変化を探ることを考慮したからである。年齢は20代から30代で日本に滞在した期間は2ヶ月から4年1ヶ月まで多様である。参加者の職業は会社員が7名、主婦が2名、英語の教師が1名、ワーキングホリデーの資格でアルバイトをしている人が3名、学生（専門学校・大学院）が2名である。

4.2 クラスの概要

本コースは週1回、2時間の日本語会話クラスで2時間の中、約40分間を発音グループモニタリング活動に充てた。活動は事前活動と本活動に分かれていた。事前活動

とは、グループモニタリング活動が円滑に行われるために、学習者に予め発音の教材と付録のモデルテープを配布し、教材の中から教師が任意に選んだ単語や文章を練習して録音してくるよう課題を出したものである。課題をする際、どうしたら発音がうまくできるかについて考えてくるよう指示し、発音学習日記も書かせた。発音学習日記はグループ活動の際、円滑に活動が行われるよう話の材料を事前に用意させるためであり、本稿でのデータとしては使用していない。グループモニタリング活動の際、お互いに質問する項目として、①発音を練習しながら難しかった点、②発音を練習しながら気づいた点、③練習しながら発見した発音方法の3つには必ず触れて、それ以外は自由に話してもいいようにした。授業の後はグループで話し合ったことを踏まえ、もう一回復習として録音するよう課題を出した。活動で使う言葉は日本語と韓国語いずれも許容した。

4.3 データ収集方法

コース開始前に学習者一人につき約30分に亘ってインタビューを行い、録音した。インタビューの内容は、発音学習目的・学習経験・発音のことで困った経験・苦手な発音・発音クラスのイメージを聞いた質問紙に自由に記述してもらい、それを中心に韓国語で自由に語ってもらった。コース終了後のインタビューは、学習者一人につき約30分間に亘って行った。インタビュー項目は、このコースに対する全体的な感想・各活動に関する感想・不満だった点・一番よかった点・変わったところはあるかが中心になっていたが、学習者に自由に語ってもらったものも録音した。クラスに参加した学習者は計15名であるが、1名については、データが完全に揃っていないため、対象から外すことにした。

4.4 分析の手順

コース前後のインタビュー記録（音声テープ）の文字化資料（韓国語）を用いて、意識の変化に関わると考えられる発話を全て抽出、カテゴリー化し、コーディングして分析を行った。補助データとして、毎回のグループモニタリング活動後の感想シート（韓国語＋日本語）を参考にした。

5. 結果

分析の結果、①発音に対する意識的な自己モニタリング、②自己評価の具体化、③発音学習観の変化、④発音に対する自信の現れという4つの意識の変化が現れた。

5.1 発音に対する意識的な自己モニタリング

コース開始前と終了後のインタビューを分析した結果、意識的なモニタリングに繋がるコメントが学習者全員の発話から得られた。コース開始前に取ったインタビュー資料では、学習者はほとんど自分の発音を意識していなかった。例えば、日本語で話すとき、文法や語彙に気を使うのに精一杯で発音にまで気を使う余裕がないから口から出るまま話した（12名）という発言が多かった。

このようにコース開始前のインタビューでは、自分の弱点を把握していないことからどこに注意を払えばいいか分からなかったが、コース後のインタビューでは、「自分の発音のどこが問題か分かったから、どの発音をどのように気をつけているかを詳しく述べている」（G1、G2、G3、G4、G5、G6、G7、G8、G9、G10、G11、G12）、「注意を払って話すから話のスピードが遅くなったり、たどたどしくなったりする自分を意識している」（G7、G12）、「教室以外でも発音だけでなく、自分の口の中を考えたり、他人の話している口の形を観察している」（G12、G13）、「他の人の話を聞くとき、発音に注意しながら聞く」（G4、G5、G6、G14）、「発音を正確にするために重要な綴りに気をつける」（G9、G14、）という発言から、普段の生活で人の話を聞くときも発音に注意して聴いたり、相手の話している口を観察したりして発音に注目することが分かった。このことから、学習者はコース開始前より発音に対して意識的にモニターしていることが分かった。

5.2 自己評価の具体化

コース開始時のインタビューの際、自分が苦手だと思っている発音について尋ねたが、一人を除いた全員の学習者が自分の苦手な発音を具体的には把握しておらず、答えられたとしても周りの日本人から指摘されたものをそのまま答えとするという状態であった。つまり、自分の発音に意識的に注意を払おうとしても自分ができる発音とできない発音が区別できないので、どこに注意を払えばいいか分からないのがコース開始時点の学習者の実態であったと言えよう。例えば、学習者 G5 は、日本人の友達に「つ」の発音が悪いと言われ、2 時間をかけて矯正してもらい、やっと「よくなった」と言われたという。ところがその時、自分がどうやってうまくできたか分からなかったため、また以前の発音に戻ってしまったと述べている。つまりこれは、日本人母語話者のモデル発音を一所懸命に真似しても、なぜ発音ができないか、どうすればうまく発音できるかを十分考えずに真似しただけでは一時的にできても、すぐまた元

に戻り、目的を達成することが難しいことを端的に表している例である。

また、同じ発音でも音環境によって発音がうまくできる場合と、できない場合があるので、自分が苦手な発音を把握した上で、なぜ間違えるか、どう直せばいいかを考えることは重要である。例えば、学習者 G4 は、グループの仲間に「つくえ」はうまく発音できるのに、「ひとつ」はうまく発音できないことに気づいて「つ」の発音全部ができないとは限らないと述べている。

表1はインタビューの内容を基にして作成したコース開始前と終了後に自分の発音のどこが問題と思うかを自己評価してもらったものである。ここから、学習者の自己評価が具体的になっていることが一目で分かる。学習者はインタビューで、グループモニタリング活動を経験することで、自分が苦手だと思っていた発音が実際はできることに気づいたり、できないと思っていた発音ができないと気づいたりしたと述べている。また、問題と感じていた発音が同じ濁音でもコース後は「じゃ」、「ぞ」、「じょ」などと、濁音の中でもさらに個別な音に具体化している。問題と感じる発音が同じ長音の場合でも、長音は発音できるものの綴りを間違えて覚えていたため、発音に誤りが生じたことに気づき、これから正確に単語を覚える必要があるというように、さらにより具体的な因果関係で捉え直した自己評価をしている。「全然分からない」、「すべてが悪い」と答えた学習者も問題を感じる発音を具体的に述べるようになり、コース開始前とは違う結果となっている (G1、G7、G8、G11、G14)。

【表1】自己評価の具体化

コース開始前（発音の問題の自己評価）		コース終了後（発音の問題の自己評価）
G1	全部自然でない	イントネーション
G4	「つ」の音	「ちゅう」、「つ」（意識しないと間違える）
G5	「つ」、「ぞ」	「ざじずぜぞ」の音、アクセント、促音
G6	分からない	長音、促音、「つ」の音
G7	韓国人に問題がある発音全部	「つ」、「ざじずぜぞ」の音
G8	分からない	「つ」の音（意識しないと間違える）
G9	濁音、長音	「じょ」の音
G11	よく分からない、最後まで発音しない	「ざ」、「じゃ」の音
G14	分からない	「ん」の音、「ザ行音」（意識したらできる）

5.3 発音学習観の変化

発音学習観の変化には、発音学習の目的の変化と発音学習に対する自律的な姿勢が窺えた。このコースに入る前の発音学習の目的とコース終了後の目標は大きく変わった。

ていた。また、発音クラスのイメージや教室外の学習に対する態度も大きく変化していることが分かった。

5.3.1 発音学習目的の変化

(1) より現実的な学習観

コース開始前のインタビューでは、5割の学習者が日本人のような完璧な日本語を求め、後の5割の学習者は自分の意志を正確に伝えるようになる、また通じるくらいの発音で話すことが発音学習の目的であった。しかし、コース終了後のインタビューでは、発音学習の目的が変化している学習者が多く見られた。

まず第1の変化は、日本人のような完璧な発音を求めず、通じるほどの発音を求めるようになったことである。日本人のような完璧な発音で話すことを目指していた学習者（G3、G13、G14）は、グループモニタリング活動を通して他の学習者にアドバイスを受けて一所懸命練習したが、日本人のような完璧な発音で話すことは難しいと自分の限界を認識し、完璧さを求めなくなり、コミュニケーションに支障がない発音ならそれでいいと述べている。次のインタビュー資料を見ると、学習者 G13 は自分が何のために日本語を学んでいるかを認識し、学習観がより現実的になっている。

【コース後のインタビュー資料 4.1】 学習者 G13 の学習目的の変化

勉強してみて気づいたのは、私は外国人だからどんなに練習して頑張っても日本人みたいな完璧な発音で話すのは難しいということです。アクセントは重要だと思いますが、それ以外は、私が学問的に日本語を学ぶのではなく、人と会話する手段として学んでいるから、人に通じればそれでいいと思っています。

(2) 他の学習への広がり

第2の変化は正確な語彙の学習への注目である（G9、G14）。グループモニタリング活動で長音と促音をよく間違えると指摘された学習者 G9 と G14 は、長音と促音の発音が易しいと思っていたのに、よく間違えるのは単語の綴りを正しく覚えていなかったからであることに気づく。そして、単語を覚える時、正確に覚えることが発音学習にも繋がることに気づく。次のインタビュー資料は、学習者 G14 が普段の生活で発音を意識的にモニターし、どこが問題だったかを探り、綴りの重要性について気づいたことを表している。

【コース後のインタビュー資料 4.2】学習者 G14 の学習目的の変化

ある日、喫茶店で注文をしたんですけど、カプチノって言ったら、店員さんに伝わらなかったんです。正確な発音はカプチーノですよ。【意識的なモニタリング】

この授業が終わったときには、もう基本的なポイントは分かったから、正確な語彙の勉強がもっと必要だということがわかりました。【具体的な自己評価】

促音が入るかどうか、長音が入るかどうかが私がいなければ、正確に発音できないですよ。日本人みたいな発音じゃなくて正確な発音で言いたいというふうに考え方が変わりました。正確な発音で伝えたいです。【学習観（目標）の変化】

(3) 聞き手を意識

第 3 の変化は、相手が聞きやすい発音を求めるようになった (G4、G6) ことである。会社員の G4 と G6 は、会社での会議やプレゼンテーションをする際、発音のことで困った経験がありながらも、自分は外国人だから発音が下手なのは当たり前だという考え方から発音学習はいつも後回しだったという。しかし、グループモニタリング活動では、日本人の発音ではなく同じ立場の学習者の発音を「聞く側」となる。学習者が聞きやすい発音と聞きにくい発音を経験することにより、自分の発音を振り返ることができ、聞く立場を意識するようになったということが学習者の発言から窺える。また、同じ立場である仲間が徐々に発音がよくなることに気づき、「韓国人でもあのようにならなれるのにはじめて気づいた」という学習者の発言から、コース以前に持っていた外国人だから発音が下手でもいいという意識からもっと発音学習に力を入れようとする積極的な姿勢が窺え、発音学習への動機づけに繋がったと言えよう。

5.3.2 発音学習に対する自律的な姿勢

(1) 教師以外のアドバイスも認めるようになる

コース開始前に発音授業のイメージを聞く質問に対し、従来の授業の影響もあると考えられるが、全員の学習者がネイティブ教師、または日本人が発音を矯正する授業をイメージし、そのような授業がもっとも効果的であると答えていた。しかし、コース終了後のインタビューの結果からは、学習者は一緒に勉強している仲間との活動や仲間の意見を重視し、日本語母語話者から矯正される発音授業だけが有効であるという考え方から、身近な仲間のアドバイスも発音学習に役立つという考え方に変化していることが分かる。例えば、一人では気づけなかったことをみんなと一緒に話すことによって分かるようになったという意見や、一緒に聞いてお互い話すことで、「誰々さんに、発音を直すように練習もさせられたのがよかった」などの発言から、学習者はグループのやりとりをとっても役立つものとして認識し、互いが協力し合うことを自分

の発音学習に積極的に利用していることが分かった。

また、学習者が自分の仲間の意見を重要なものとして位置付けており、自分の学習に積極的に反映していることが、コース終了後のインタビューと評価シートの分析から分かった (G2、G4、G5、G8、G10、G13、G9、G14、)。例えば、グループのメンバーの新たな意見を聞いて、今まで意識しないで聞こえるまま真似をしていた自分の態度を反省し、これからは自分なりの規則を見出して意見を述べたいという発言 (G13、G14) からは、仲間の意見が発音学習に役立つことに気づき、自分もそのような意見が述べられるように頑張ろうとする自律的な姿勢が現れたと言える。このような意識の変化は、さらに自分の発音学習を管理する姿勢を促していることが次の例で窺える。例えば、自宅で課題を一所懸命してきた時は、グループで意見がたくさん述べられてとても面白いが、あまり練習してこなかった時は意見を言えず、仲間の話もすぐ理解することができないので、授業で得られるものが少ないし、グループのメンバーに悪いと思う (G9、G10、G12) という発言は、学習に対する責任が自分にあることを表している。

(2) 教室外の学習を促進

コース終了後のインタビューから、教室以外でも発音学習をする学習者が多く見られた (G1、G2、G4、G5、G6、G9、G10、G11、G13、G14)。カセットテープに自分の発音を録音して聞いてみる方法や発音勉強会を作って他の友達と一緒に勉強する方法など、この教室で学んだやり方を生かして発音学習をしている学習者もいた。また、学習者の中には自分に合う発音教材を自分で作ってみたいという学習者もあり、コース開始前のインタビューで普段発音学習をしているかという質問に対し、一人 (G2) を除いた全員が学習していないと答えたことと比べると、学習者の変化は一目瞭然である。

5.4 発音に対する自信の現れ

コース開始前のインタビューでは、問題があると指摘された発音や苦手だと思う発音が含まれている単語を言う時、自信がないため、ごまかしたり他の単語に変えて話したりするという回避ストラテジーをとる学習者が多かった。また、自分の発音のどこが問題か分からない学習者の場合、相手に自分の話したことが伝わらなかった時には、どうして伝わらなかったのかその原因が分からず、話す自信をなくしてしまうと述べている。次の発話は学習者 G11 と G14 のコース開始前のインタビュー資料である。

学習者 S2 は、聞いている日本人が聞き間違えた可能性がある時も学習者は自分の発音に問題があるから相手に伝わらなかったと思ひ込み、自分のせいにしてしまうと述べている。

【コース開始前のインタビュー資料 4.3】 学習者 G11 の発音に対する不安

私が話しているとき相手の反応があまりないとちょっと心配ですし、発音がまた悪かったのかなと思っちゃいますね。

【コース開始前のインタビュー資料 4.4】 学習者 G14 の発音に対する不安

日本人が聞き間違えたときは、ものすごく困ります。そのとき、私がなんか間違えて発音したかなと思ひながらも、もっと緊張して発音がうまくできません。

このように学習者は自分の発音のどこが悪いかが具体的に把握できていない不安からコミュニケーションに問題が生じる場合はすべて自分の発音のせいにする事が多く、次のコミュニケーションの場面で自信をなくす原因になると述べている (G2、G3、G6、G7、G9、G11、G12、G13)。そして、正確な発音で話すようになればコミュニケーションに自信を持つことができると述べている。

コース終了後のインタビュー資料では、苦手だと思っていた発音がグループの仲間との活動で発音できるようになったことに気づき、緊張しないで自信を持って話せるようになったという発言 (G2、G9) や自分の発音にまだ問題があるかもしれないが、どの発音を注意して言わなければいけないかが分かったから、緊張しないで話せるようになったという発言 (G3、G7、G9、G11、G14) があつた。次は、学習者 G11 と G14 のコース終了後のインタビュー資料である。全体的な感想として、自分が正しく知っていると思っている発音については自信を持って話すことができ、苦手な発音の場合も自分が苦手だと知っているので注意することができるかと述べていることから、発音に対する自信が現れていると言える。

【コース終了後のインタビュー資料 4.5】 学習者 G11 の自信の現れ

今日もスーパーで、ケーキ、パンを言うとき長音に意識して言いました。授業でやったところは、正確ではないかもしれないけど、自信を持って話せました。スーパーで、「どんな材料を使ったパンですか」と聞いたときに店員さんに「え？」って聞き返されましたけど、緊張しないで大きい声で話せたんです。

【コース終了後のインタビュー資料 4.6】 学習者 G14 の自信の現れ

クラス以外の人と発音について話すときも、この発音はこうだから正しいと思うなど、自分が正しく知っている発音については自信を持って話せるのが嬉しいです。私がよく間違える発音は、私が苦手だと知っているから、日本人と話す時、私はこの発音が苦手だからと話せるし、気をつけて言おうと注意しているからいいと思います。

6. 考察

コース開始前は自分の発音を意識的にモニターすると答えた学習者は2名で少なかったことに対し、コース終了後のインタビューでは全員の発話から意識的に自分の発音をモニターしていることが見られた。このように意識的な自己モニタリングが現れた要因として何が考えられるのだろうか？第一に、意識的にモニターをする活動の繰り返しが挙げられる。活動の繰り返しによって、意識的なモニターをしなかった学習者も、自然に自分の発音や他の人の発音をモニターするようになったと考えられる。第二に、活動のやりとりの中でモニタリングに必要な方略を他の学習者から学べたことが挙げられる。コース開始時に、学習者の中には、聞こえたとおりに真似するだけで、自分がどのように音を出しているかに気がつかない学習者が大勢いた。そうした学習者たちは、活動の中で仲間とのやりとりを通し、仲間から音を出している時の、発音の仕組みなどに自然に触れることができる。このような多様なモニタリングの方略に触れたことが意識的なモニタリングができるようになったことに繋がった可能性がある。

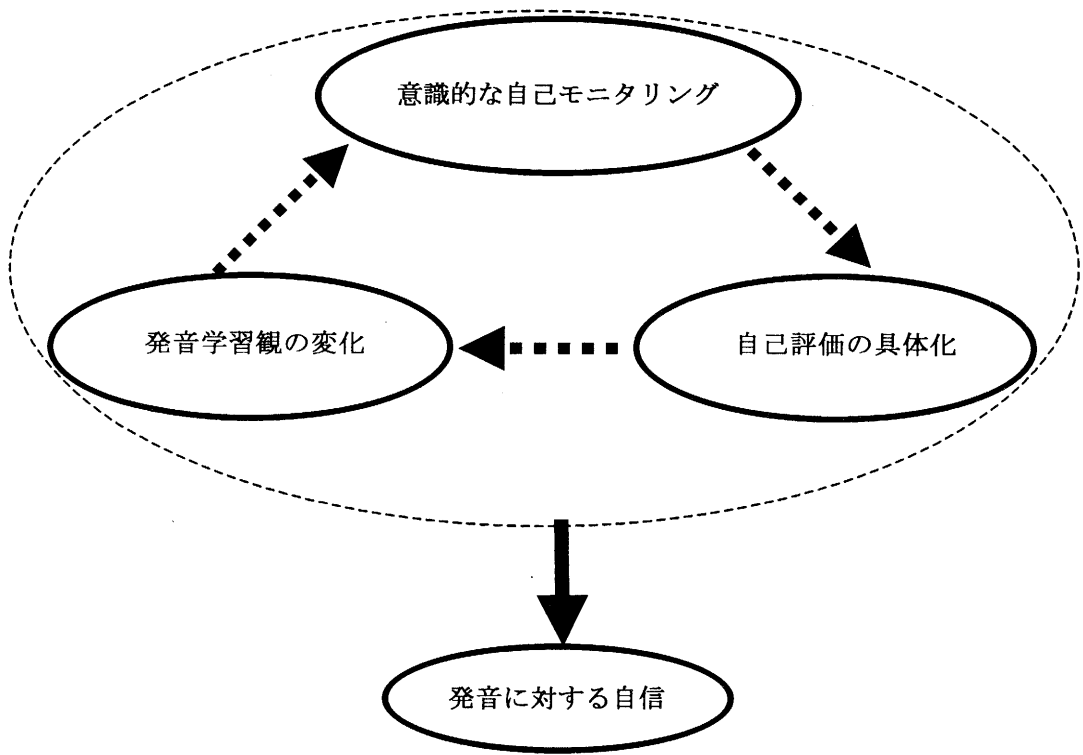
学習者の自己評価が表1を見ると、コース終了後のインタビューで具体的になっているが、その要因は何であろうか。倉戸(1994)は、学習者が何かを知らないこと、また何を知らないかに気づくことから始まり、何をどのように学んだらいいかを考え、実行することによって何か分かれると述べている。その「分かった」ことが、また次の疑問を生み出していくことになるという。つまり、自分の無知への知覚は今後の学習への大きな動機づけになり、このような自らの思考・知識の状態について分かることをメタ認知としている(倉戸1994:120)。本研究において学習者が具体的な自己評価ができるようになったのは、グループモニタリング活動の中で、自分の発音についての内省や他の学習者からのアドバイスを通して「自分の発音の問題」を知覚することができる。そして、そのような知覚によってさらなる目標を設定して達成していく過程で、自己評価が具体的になったと考えられる。

「自己評価の具体化」、「意識的な自己評価」、「発音学習観の変化」、「発音に対する自信の現れ」という4つの変化は、個別的なものではなくそれぞれ関連していることが分かった。例えば、学習者G14のインタビュー資料を見ると、学習者G14が喫茶店で注文する際、店員さんに伝わらなかった原因について長音が抜けているからだ述べている。このように意識的にモニターし、単語を正確に勉強することが必要である

と具体的に自己評価をするようになっていく。さらに学習者 G4 がコース開始前に持っていた「日本人のような発音で話したい」という発音学習目標から、「正確な発音で話したい」というように発音学習観も変化している。他の例として資料 4.1 の発話を挙げたい。資料 4.1 の発話は、一見学習者が発音学習をあきらめているような発話で、否定的に捉えられるかもしれないが、自分の限界を認めたからこそ次に進むことができ、それによって発音学習観も変わっている。つまり、意識的にモニターすることによって、自分の問題に気づくことが多くなり、それは具体的に自己評価することを可能にしている。自分の問題が何であり、それを直すためにどうすればいいか考えることで、自分の発音学習観や目標を見直すことができる。このような過程を繰り返すことによって、自分の発音のどこが問題か分からないときに比べれば、不安が減少し発音すること、つまりコミュニケーションに対する自信へと繋がると思われる。このような意識の変化の関連を図に表すと図 1（次頁）のようになる。

本稿の結果は、グループモニタリング活動が様々な活動（学習日記や感想シート、学習者同士のやりとり）を組み込んだ活動であることと大きく関連していると思われる。そのことによって、学習者が自分の発音や発音過程に注目し、より効果的に意識の変化が促されたものと考えられる。

また、日本語教育現場で発音授業自体が少ないことを考慮すると、別の指導法で授業を行っても何らかの意識の変化が現れる可能性は否定できない。しかし、グループモニタリング活動では、学習者に発音を教え込むのではなく、各自の発音に対する問題の解決や気づきを促すような活動を行ったことを考えると、発音の問題解決への積極的な姿勢や学習観の見直しなど、他の発音授業形態とは異なる影響があったと考えられる。また、このようなきっかけがこれからの発音学習への動機づけやコミュニケーションに対する自信に繋がる可能性も示唆された。



【図1】意識の変化

6. まとめと今後の課題

本稿では、コース前後のインタビューの分析結果に焦点を当てて、グループモニタリング活動の可能性の一つとして学習者の意識に現れる変化を検討した。その結果、自分の発音を常に意識し、自分の発音のどこに問題があるかについてコース前より具体的に評価できるようになっていることが分かった。このことは、学習目標や学習方法にも影響を与え、発音やコミュニケーションに対する自信にも繋がる可能性が示唆された。学習者のニーズを正しく授業に反映し、学習者を積極的に発音学習に参加させるためには、学習者を自分の発音や学習過程に注目させる活動が必要だということが本研究の結果から示唆された。

今回は学習者の意識に焦点を当てているため、学習者の発音に改善があったかどうかまでは検討していない。このような学習者の意識の変化が学習者の発音の改善にどのように結びついたかも検討する必要があると思われるが、それは今後の課題としたい。

注

- (1) 仲間によるモニタリング
- (2) 42 項目からなる質問紙で、内容は発音学習ストラテジーの使用に関するものである。
- (3) 同じ母語話者であっても、その言語を使っている人の性別、年齢、社会階層、出身によって少し異なる形が見られる。今回の活動で、学習者が取り上げた社会言語的知識は、「無声化をする人とならない人がいるが、その差は何か」、「鼻音化した方がいいか」などがある。

参考文献

- (1) 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』 凡人社
- (2) 小河原義朗 (1998) 「外国人日本語学習者の発音学習における自己モニター研究」 『東北大学大学院博士論文』
- (3) 倉戸ツギオ編 (1994) 『発達と学習の心理学－自己教育力を育む』 120-121 ナカニシヤ出版
- (4) 日本語教育学会 (1991) (編) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』 凡人社
- (5) 村本 陸 (1999) 「自律的な推敲能力の育成に向けた文章表現の指導」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』、22
- (6) Gergana, V. & Ann M. (2002) Reflective Practice in Pronunciation Learning. *The Internet TESL Journal*, V.8,N.1
- (7) Kenworthy, J. (1987) *Teaching English Pronunciation*. Harlow, U.K.: Longman.
- (8) Neufeld, G. (1980) On the adult' ability to acquire phonology. *TESOL Quarterly*, 14 (3), 285-298
- (9) Morley, J. (1975) Round Robin on the teaching of pronunciation. *TESOL Quarterly*, 9(1),81-88

ばん ひょんひ／お茶の水女子大学大学院
hh9518@yahoo.co.jp

On the potential of group-monitoring during pronunciation practice: focusing on changes in the learner's consciousness

Bang Hyunhee

This paper intends to show the potential of group-monitoring in how language learners consciously correct themselves through either pronunciation in the target language with one's peers or interaction with socio-linguistic knowledge, or through self reflection or regulated group-monitoring.

The results of the analysis of data taken from interviews of 14 Koreans learning Japanese before and after their course shows changes in "self-monitoring", "concrete self-evaluation", "changes in approach to pronunciation practice" and the "emergence of confidence."

These results show that it is possible to be conscious of one's own pronunciation and approach to pronunciation practice through group-monitoring. Since the change in consciousness develops through re-establishing the approach of learners or the goal of pronunciation practice, it reveals the potential to develop confidence in communicating and inducing pronunciation practice.

(Graduate school, Ochanomizu University)